

専門知識を身につけ

後を継ぎたい

野沢周平さん（多功本町）



8月7日(日)に東京都で開催された第5回高校生ものづくりコンテスト全国大会に出場した野沢周平さん（県立小北校高等学校3年生）に話を伺いました。

この大会は全国10ブロックに分けて地区予選を行い、建設系の作品7部門の内、野沢さんは木材加工部門に出場しました。関東大会では39人が出場。準優勝し、全国大会の切符を手に入れました。

野沢さんのお祖父さんとお父さんは建具士で、全国大会に出場が決まったときには大喜びでした。

大会に出場する時は、材料と図面が課題として渡され、お父さんからアドバイスを受けながら、全国大会

今月の輝ける星

へ向けて練習を重ねました。

全国大会では、10人で技術とスピードを争いましたが、極度の緊張のあまり、のみを折ってしまったとのこと。

野沢さんは、「小さい頃から、お父さんの建具のあまった材料を使い、一人でいろいろなものを作っていました。」と話しており、小学生の時から図工が大好きで、一番思い出に残っているものは、「小学生のときに作った18角のサイコロです。」とやさしい笑顔で答えてくれました。中学生のときに作った椅子の作品は、先生の目に留まり、東京都で展示されたとのこと。

昨年は製図の大会にも出場し、今年9月にも先生の推薦で製図の大会に出場する予定です。今後の目標について尋ねると、「進

学し専門的な知識を身につけて、お父さんの後を継ぎたいです。」と力強く答えてくれました。



全国大会（左側）と関東大会（右側）の作品



現在75歳で、前職はサラリーマンでした。「勤めているときは、時間との戦いでしたが、現在は自営業なので自分の体と相談しながらできる。また、専門部会の会員さんたちも若い人が多いので、その考えに合わせなければならぬ。」と若さの秘訣を教えてくださいました。

ナスは非常にデリケートで、台風による影響が大きく、また害虫や病気にも弱いので、圃場の管理や土にまでこだわりを持っています。特に11月まで生産し、「農業祭に無償配布をするのが楽しみです。」と話しており、霜が降りる10月末から11月にかけては、寒冷紗という霜よけを使いながらナスを管理しています。

青柳さんは「人間社会と違って野菜は裏切らない。手を掛ければ掛けただけ楽しみがある。」また、「消費者に喜ばれるようなナスを生産し出荷したい。」とナス生産に対する情熱を語ってくれました。

わが町の農産物



ナス編

今月の農産物はナスです。

J Aうつのみやナス専門部会の部会長であります青柳一巳さん（上郷2区）にお話を伺いました。

ナス部会は、現在20人が専門部会に所属しています。3月末から定植をし、手入れ次第では霜にも強いため、11月中旬頃まで収穫できるとのことです。現在収穫が最盛期で、青柳さんのお宅ではコンテナの箱で1日に10箱収穫をしています。今の時期はナスの成長が早いため、物によっては大根くらいの太さになってしまう物もあるそうです。

青柳さんがナスを始めたのは7年位前で、農協の勧めで始めました。先輩の指導により作物ができるようになり、奥さんと二人で生産を行っています。人手が足りないときは、お孫さんにも袋詰めや出荷などを手伝ってもらっているとのこと。

